

氏名 檀 上 博

学位の種類 医学博士

学位授与番号 乙 第 779 号

学位授与の日付 昭和 51 年 6 月 30 日

学位授与の要件 博士の学位論文提出者  
(学位規則第 5 条第 2 項該当)

学位論文題目 濾胞性肝炎の肝組織の電子顕微鏡的研究

論文審査委員 教授 大 藤 眞 教授 妹 尾 左 知 丸 教授 小 川 勝 士

## 学位論文内容の要旨

慢性肝炎の病因は、現在主として自己免疫という立場で論じられているがまだ完全には解明されていない。そこで自己免疫としての組織表現をもつ濾胞性肝炎のグリソン氏鞘に形成されたリンパ濾胞の構成細胞を超微形態的に検討し、免疫反応の組織表現とされている局所リンパ節のそれと比較考察するとともに、その肝小葉限界層における浸潤細胞と肝細胞の態度も電子顕微鏡的に観察し、細胞性免疫現象の面からも検討した。

グリソン氏鞘に見られるリンパ濾胞の芽中心は多突起性細胞、Immunoblast および核分裂像や大食細胞で構成されており、暗殻部はLymphoblast，未熟リンパ球，小リンパ球および破壊されたリンパ球と少数の形質細胞で構成されていた。これは、抗原刺激をうけた局所リンパ節のリンパ濾胞の細胞構成と一致している。

限界層破壊部ではリンパ球が肝細胞や細胆管細胞に密着して存在し、その肝細胞や細胆管細胞には変性所見が著明であった。また形質細胞が接した肝細胞や細胆管細胞でも程度は軽度であったが、同様な所見が観察された。

以上のことは、グリソン氏鞘の局所で抗原刺激による免疫組織系の反応が活発におこなわれていることを示し、同時にその限界層部では細胞性免疫による、肝および細胆管細胞障害が存在していることを示唆している。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は濾胞性肝炎の肝組織を電子顕微鏡的に研究したものであるが、従来十分確立されていなかった慢性肝炎の自己免疫的立場での細胞構成に関し重要な知見をあげ得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究は医学博士の学位を得る資格があると認める。